

既有プランが上級日本語学習者の 文章産出過程と文章に与える影響について — 中国語を母語とする留学生の場合 —

衣川 隆生

要 旨

本稿の目的は、日本語を第二言語として学習している書き手が、文章を書きはじめる前に信念・知識としてどのような文章構造のプランを有しているか、そして、そのプランが文章産出過程と書き上げた文章にどのような影響を与えるかを明らかにすることにある。この課題を明らかにするため、中国語を母語とする留学生4名から、事前アンケート、事前インタビュー、発話思考法を用いた説明文の産出、事後インタビューによって資料が収集された。資料は、文章のどの部分に統括機能を置くか、文章をどのように構成するかという視点から分析された。分析の結果、1) 既有プランを持っている場合には、そのプランが文章の方向性を示し、その方向性にそって文章産出が進められる、2) 既有プランは書き上げた文章の構成に反映する、3) 既有プランを複数持っている場合には、効果的であるという信念を持っている既有プランを用いて文章を書き上げる、という結果が得られた。以上の結果から、本稿の最後では、今後、日本語学習者に対して、文章の目的に合った適切な文章構成型を知識として与えるだけでなく、それらが効果的なものであるという信念を形成する指導が必要であるという提言を行う。

【キーワード】 説明文 文章産出過程 文章構造 文章 既有プラン

The Effects of Existing Plans on Composing Processes and Products of Four Advanced Japanese Learners

Kinugawa, Takao

This study examines the existing text structure plans which advanced Japanese learners have as beliefs or knowledge and the effects of these plans on composing processes and products. The data for analysis were collected by pre-task interviews, questionnaires, writing tasks, and post-task interviews from four advanced Japanese learners whose native languages was Chinese. The data were analyzed according to the parts the writers used for the summary in the texts and how they organized the texts. The results are the follows: 1) Where there were existing plans, they indicated the directions of composing, and the actual composing processes proceed with these directions. 2) The existing plans were reflected in text structures in products. 3) If writers have two or more existing plans, they composed using the plan which they believed effective. Finally, the author discusses how Japanese teachers should instruct advanced Japanese writing classes.

1. はじめに

「文章の書き方」を指導する際、文章を書き始める前に十分時間をかけて文章のプランを計画させるべきだという指摘は多い⁽¹⁾。

この点について、衣川（1994）は、文章産出過程でプランの計画にかけた時間と書き上げた文章の質との関連性を分析し、時間をかけてプランを計画するような文章産出過程を経て書き上げられた文章は、その評価が低くなる可能性を指摘している。そして、この結果について、衣川（1995）では、計画されたプランの質が重要であり、計画にどの程度の時間をかけたかは評価には影響を与えないことを指摘している。さらに、評価が高い文章の書き手は文章を書き始める前に、文章構造、書き出し、及びしめくくりをどう書けばいいかという文章の全体的なプランを持っており、そのため、計画に時間をかけなくても評価の高い文章が書けるという可能性も示している。

文章を書き始める前に書き手が持っているプランが、文章の質を決定するのなら、作文指導を行う際、実際に書かせて練習させる以上に、プランを内在化させるような活動を考案しなければならないだろう。そのためには、まず、書き手が文章を書き始める前にどのようなプランを持っているか、そして、そのプランが文章産出過程と書き上げた文章にどのように影響を与えるかを分析することが必要だと考えられる。そこで、本稿では、中国語を母語とする留学生4名を事例として取り上げ、以下の課題を検討することにする。

- 1) 書き手は、文章を書く前にどのようなプランを持っているか。
- 2) 書き手が持っているプランは、どのように文章産出過程に影響を与えるか。
- 3) 書き手が持っているプランは、どのように書き上げた文章に影響を与えるか。

2. 研究の枠組み

Scardamalia & Bereiter（1987）は、熟達した書き手と未熟な書き手の文章産出過程をモデル化している。そのモデルによれば、熟達しているか未熟かに関わらず、文章産出過程では「内容的知識」と「文章構成に関する知識」が活用される。

本稿では、このうち、「文章構成に関する知識」を、書き手が文章を書く前に持っているプランと考え、このプランを「既存プラン」⁽²⁾と呼ぶことにする。

では、もう一方の知識である内容的知識は、文章産出過程と書き上げた文章にどのような影響を与えるのだろうか。

Voss et al.（1980）は、内容的知識の量が文章産出過程に与える影響を分析し、知識が少ない場合には、そもそも適切なプランが計画できないために文章が書き始められないことがあるということを指摘している。さらに、プランが計画できたとしても、十分な知識を持っていない場合には必要な内容を引き出すことができないため、必要十分な内容を盛り込んだ文章を書くことができないという可能性も示唆している。

さらに、Langer（1984）は、内容的知識の量だけではなく、書き上げた文章の質と知識の構造化

の度合いの関係を分析し、「比較・対照」タイプの課題では、知識の構造化のされ方と文章の質との間には高い相関が認められるという結果を示している。

このように、内容的な知識の量と構造化のされ方は、文章産出過程と書き上げた文章に影響を与える。本研究では、このような内容的な知識が与える影響をコントロールするために、文章で書くべき内容は課題とともに与える図表に盛り込むことにする。

また、話題に対する意見を要求した場合には、話題に対して肯定的立場に立つか否定的立場に立つかが文章産出過程と書き上げた文章に影響を与える可能性がある。そこで、この影響もコントロールするために、事実を客観的に説明する文章を課題として与えることにする。

3. 研究方法

3.1 調査協力者

名古屋大学留学生センターの研究生2名と名古屋大学経済学部1年に在籍する留学生2名とに協力を得た。これらの調査協力者は国籍は異なるが、中国語を母語としている点で共通している。中国語母語話者を調査の対象としたのは、名古屋大学に在籍する留学生の約半数を中国語母語話者が占めているためである⁽³⁾。調査協力者4人の背景的情報を表1に示す（以下それぞれ個別に示すときには表1に従ってA～Dの略号を使用する）。このうちAとBが名古屋大学留学生センターの研究生であり、CとDが名古屋大学経済学部にて在籍する留学生である。

表1：協力者の背景的情報

協力者	A	B	C	D
調査日	'95年8月7日	'95年8月26日	'95年11月28日	'95年11月29日
性別	男性	女性	男性	女性
日本語学習歴	7年	7年6ヶ月	1年8ヶ月	1年6ヶ月
滞日年数	4ヶ月	5ヶ月	8ヶ月	7ヶ月

3.2 資料収集方法

資料は、事前アンケート、事前インタビュー、発話思考法、事後インタビューの4つの方法で収集した。

まず、調査の依頼を行い、了承を得られた時点で、事前アンケートを渡した。そして、このアンケートは調査時に回収することを伝えた。アンケートでは、背景的情報を収集するための質問を17項目、作文に対する態度と動機付けについての質問を12項目、文章に対する信念を問う質問を25項目、文章産出に対する信念を問う質問を22項目行った。本稿では、これらの質問のうち、文章構成に対する信念を問う質問2項目を分析の対象とする。

調査では、アンケート用紙への記入を確認した上で、10分程度の事前インタビューを行った。イ

インタビューは大きく母語を使用した作文に関わるものと日本語を使用した作文に関わるものに分かれる。それぞれ、作文教育歴、現在どのような頻度で文章を書くか、説明文を書く際にはあらかじめプランを持っているかどうか、持っているとしたらどのようなプランを持っているかについて質問を行った。

次に、発話思考法の練習を行い、作文課題を配布した（資料1参照）。その課題が理解できたことを確認してから、発話思考法を行いながら文章を書きはじめてもらった。同時に、ビデオによる状況録画も行った。作文課題には「試験だと思って書くこと」、「字数400字」、「30分以内」という制限を加えた。課題の状況として試験状況を与えたのは、レポート、論文と比較すると、試験状況が使用できるリソース、時間などの点で最も制限された状況であるため、より均質な資料が得られると考えたからである。

さらに、文章を書き終えた時点で、10分程度の事後インタビューを行った。インタビューでは既存プランと文章産出過程の関係について質問を行った。

3.3 資料分析方法

資料収集の結果、次の5種類の資料を得た。

- (1) 事前アンケート結果
- (2) 事前インタビューによる発話資料
- (3) 発話思考法による発話資料
- (4) 事後インタビューによる発話資料
- (5) 書き上げられた文章とメモ用紙

3.3.1 既存プランの分析

書き手がどのような既存プランを持っているかは、市川（1978）の文章構成分析の枠組みを参考にして、次の方法で分析した。

まず、文章のどの部分に統括機能⁽⁴⁾を置くべきだと考えているかという観点から、調査協力者の既存プランを次の4つの統括型に分類する。

●統括型

- 頭括型 ー冒頭で統括するもの
- 尾括型 ー結尾で統括するもの
- 双括型 ー冒頭と結尾で統括するもの
- 非統括型 ー統括機能を持つ部分がないもの

この分類には、事前アンケート結果と事前と事後のインタビュー結果を用いた。

事前アンケートで「文章で一番言いたいことは最初に書いた方がいい」という内容を「そう思う」と答えた書き手は「頭括型」、「文章で一番言いたいことは最後に書いた方がいい」という内容を「そう思う」と答えた書き手は「尾括型」、両方の内容に「そう思う」と答えた書き手は「双括型」に分類することにする。

また、インタビューで「どういう文章構成で書きますか」という質問に対して、「最初にまとめを出して、それから詳しい説明をします」と答えた調査協力者は、冒頭に統括機能を置くという既存プランを持っていると判断し、「頭括型」に分類することにする。

次に、統括型の分析結果と事前と事後のインタビュー結果を用い、調査協力者が文章を大きくいくつの部分¹⁵⁾から構成すべきだと考えているかという観点から、調査協力者の既存プランを次の4つの構成型に分類する。

●構成型

- 一段式—文章全体が分割されないもの
- 二段式—文章が二つに分割されるもの
 - 冒頭で統括（頭括型）
 - 結尾で統括（尾括型）
- 三段式—文章が三つに分割されるもの
 - 冒頭と結尾とで統括（双括型）
- 多段式—文章が四つ以上に分割されるもの

この分類には、主に事前と事後のインタビュー結果を用いた。たとえば「どういう文章構成で書きますか」という質問に対して、「大きいことから書いて、次に小さいことを書いて、もう一度大きいことに戻ります」と答えた調査協力者は「大→小→大」という三つの構成を既存プランとして持っていると判断し、「三段式」に分類する。

3.3.2 文章産出過程の分析

文章産出過程における行動は、衣川（1993）の分析手順をもとに以下の手順で分析した。まず、発話思考法によって得られた音声資料を文字化し、次に、あるまとまった行動を行なっていると推定される単位で文字化資料を分割し、それぞれに行動範疇名をつけた。

3.3.3 書き上げた文章の分析

最後に、調査協力者が書き上げた文章が、既存プランで意図した通りの効果をあげているかどうかを調べるために、以下の手順で分析を行った。

- 1) 書き上げた文章をワープロ原稿に打ち直し、それを文単位に分割した（資料2参照）。

- 2) 次に、調査協力者とは面識のない現役の日本語教師2名に依頼し、段落⁽⁶⁾として認められる単位で文章を分割してもらった。
- 3) 書き手が意図した統括型が読み手に認識できるかどうかを調べるため、どの段落に統括機能があるかを判断してもらった。そして、文章統括型は、既存プランの統括型分類と同様に、「頭括型」「尾括型」「双括型」「非統括型」に分類することにする。
- 4) 最後に、書き手が意図した文章構成型が読み手に認識できるかどうかを調べるため、どの段落が文章の「冒頭部」、「展開部」、「結尾部」に相当するかを判断してもらった。本稿では、分析の結果、構成型の分類は、既存プランの構成型分類と同様に、「一段式」「二段式」「三段式」「多段式」に分類することにする。

なお、判定が一致しない部分については、筆者と判定者2名との協議により解決した。

4. 結果

ここでは、4人の調査協力者が、

- 1) どのような既存プランを持っているか。
- 2) 既存プランがどのように文章産出過程に影響を与えているか
- 3) 既存プランがどのように書き上げた文章に反映しているかを分析する。

4.1 調査協力者A

1) 既存プラン

Aの文章構成のプランに関わるアンケート結果を表2に、インタビュー結果から文章構成に関わる部分を抜粋して表3に示す。

表2：協力者Aのアンケート結果

質問項目	回答
文章で一番言いたいことは最初に書いた方がいい	あまりそう思わない
文章で一番言いたいことは最後に書いた方がいい	そう思う

表3：協力者Aのインタビュー結果

Q：*じゃ、だいたいいつも「起承転結」で書くんですか。

I：**はい。

.....***

Q：それで、「起」ではこれとこれを書くということを考えますか。

I：あまり詳しく考えてないですけどね。

.....

I：中国語では、作文の試験が一番大事ですね。この形式の文章として書かなければならない、ちゃんと規則を守って書いたら、合格点もらえるから、このような規則を守ったら安全だと思いました。

* 「Q：」は調査者の発話を示す。

** 「I：」は調査協力者の発話を示す。

*** 「.....」は中略を示す。

表2から、Aは統括型でいえば「尾括型」の文章構成のほうがいいという信念を持っていることがわかる。

また、インタビュー結果から、Aは文章を書き始める前に「起承転結」の文章構成のプランをあらかじめ持っており、同時に、試験状況では、必ずこのような構成で文章を書かなければならないという信念を持っていることが示唆される。「起承転結」を「冒頭」「展開部」「結尾」という部分に分割すれば、以下のような三段形式になると考えられる。

起 ー冒頭

承・転ー展開部

結 ー結尾

以上の結果から、Aは統括型では「尾括型」の既有プランを、構成型では「三段式」の既有プランを持っていると考えられる。

2) 文章産出過程

Aは、1分間課題文を読み返し、原因を説明するという文章の目的を「なぜ」という形で明確化し、それをメモ用紙に書き下ろしている。さらに「起承転結」、「四段落」と文章構成を計画し、それらもメモ用紙に書き下ろしている。このようにAは文章構成を計画してから、その文章構成に沿う内容を検索し、内容が計画されたらすぐに文章を書きはじめている。

また、Aは第二段落を書き終えた時点で、すでに書き上げた部分をまず読み返し、次にメモ用紙の「起承転結」という部分を読み返し、「転」と次に書く段落の機能を明確化している。そして、「しかし」と書き下ろし、「しかし」が示す「逆接」という文章の方向性にそった内容を計画している。この行動は事後インタビューでも次のように述べられている。

I：だいたい「転」のところは「しかし」とか「でも」とか、かならずこういうふうにかくように工夫するんですけど。

このように、Aは「起承転結」という既有プランが文章の方向性として存在し、その枠組みに当

てはまる内容を計画しながら文章を書き上げているという特徴を持っている。

3) 文章構成

Aの書き上げた文章の分析結果を表4に示す。

表4：協力者Aの文章の分析結果

段落数	文番号	統括機能	冒頭・展開・結尾
第一段落	1 - 2	無	冒頭
第二段落	3 - 5	無	展開
第三段落	6 - 7	無	展開
第四段落	8	有	結尾

表4から、Aの書き上げた文章は、統括型では「尾括型」、構成型では「三段式」であると考えられる。

4.2 調査協力者B

1) 既存プラン

Bの文章構成のプランに関わるアンケート結果を表5に、インタビュー結果から文章構成に関わる部分を抜粋して表6に示す。

表5：協力者Bのアンケート結果

質問項目	回答
文章で一番言いたいことは最初に書いた方がいい	あまりそう思わない
文章で一番言いたいことは最後に書いた方がいい	そう思う

表6：協力者Bのインタビュー結果

Q：こういうふうには書けばいいなという計画は。

I：そうですね、計画なんかはありません。

.....

Q：いつも、下書きをしますか。

I：ええ、いつも、最初の部分だけ、書いてみたら、何となく、後ろは発想が出てくる。

.....

メモはいつも取るんです。最初、大体の方向を決めて、それから、メモを取る。

Q：メモは、文章に近い形にしていますか。

I：そうですね。

表5から、Bも「尾括型」の文章構成のほうがいいという信念を持っていることがわかる。

また、表6から、Bは文章を書き始める前は特定の既存プランを持っていないことが示唆される。つまり、Aのように、特定の文章構成の枠組みに当てはまるように内容を計画するのではなく、課題を与えられてから、下書きのような形でメモをとり、そのメモを取る過程で、文章構成を計画するのだと考えられる。

以上の結果から、Bは統括型では「尾括型」の既存プランを持っており、構成型の既存プランは持っていないと考えられる。

2) 文章産出過程

Bは第一文を書き始める前に、1分間課題文を読み返し、「あたしはこの原因を述べるんですね」と文章の目的を明確化している。それから、4分の時間を使って、第一段落の内容を下書きしている。そして、「よし」と方向性を確認した上で、原稿用紙に第一段落を書き始めている。

また、次の事後インタビューから、書きはじめた時点で文章の構成がすでに決定していたことが示唆される。

Q：ここまでいったところで、大丈夫、書けると思いましたか。

I：そうですね。だいたいここまで行って、じゃ、後ろ何を書くか、だいたいわかったという
ような、気が付いて、よしゃ、書こうって。

そして、メモの内容は、そのままの形式で、第一段落に書き写されている。

このように、「無プラン型」であるBは、第一文を書き始める前の段階で、下書きをしながら文章の方向性を決定し、その方向性にあった内容を計画しながら文章を書き上げていくという特徴を持っている。

3) 文章構成

Bの書き上げた文章の分析結果を表7に示す。

表7：協力者Bの文章の分析結果

段落数	文番号	統括機能	冒頭・展開・結尾
第一段落	1 - 2	無	展開
第二段落	3	無	展開
第三段落	4 - 5	有	結尾

表7から、Bの書き上げた文章は、統括型では「尾括型」、構成型では「二段式」であると考えられる。

4.3 調査協力者C

1) 既存プラン

Cの文章構成のプランに関わるアンケート結果を表8に、インタビュー結果から文章構成に関わる部分を抜粋して表9に示す。

表8：協力者Cのアンケート結果

質問項目	回答
文章で一番言いたいことは最初に書いた方がいい	どちらとも言えない
文章で一番言いたいことは最後に書いた方がいい	強くそう思う

表9：協力者Bのインタビュー結果

Q：説明する文章を書きなさいという課題があったら、どう書きますか。
I：やはり大きいことから、小さいことを書いて、もう一度大きいことに戻ります。 段落は、まとめて書いている、次は、論述します、後は、結局、結局はこういうふうになります。

表8から、Cは統括型でいえば「尾括型」の文章構成がいいという信念を持っていることがわかる。

しかし、表9から、Cは文章を書き始める前に、「大」「小」「大」、または「まとめ」「論述」「まとめ」という「双括型」で「三段式」の文章構成のプランをあらかじめ持っているということが示唆される。

以上の結果から、Cは統括型では「尾括型」と「双括」型の二つの既存プランを、構成型では「三段式」の既存プランを持っていると考えられる。

2) 文章産出過程

Cは調査者が「では、始めてください」という指示を与えてすぐに第一文を書きはじめ、文章産出過程では、1分以上の停滞は見られなかった。これは、文章を書き始める前に、すでに文章構成が既存プランによって計画されており、そのプランに合う内容を課題の図表から抽出しながら文章を書き上げていったからだと考えられる。これは、次の事後インタビューからも示唆される。

Q：書く前からこういうふうにかこうと思っていましたか。

I：一応考えていました。

このように、CもAと同じように既有プランが文章の枠組みとして存在し、その枠組みに当てはまる内容を図表から抽出しながら文章を書き上げていると考えられる。

3) 文章構成

Cの書き上げた文章の分析結果を表10に示す。

表10：協力者Cの文章の分析結果

段落数	文番号	統括機能	冒頭・展開・結尾
第一段落	1 - 3	有	冒頭
第二段落	4 - 5	無	展開
第三段落	6	無	展開
第四段落	7 - 9	有	結尾

表10から、Cの書き上げた文章は、統括型では「双括型」、構成型では「三段式」であると考えられる。

4.4 調査協力者D

1) 既有プラン

Dの文章構成のプランに関わるアンケート結果を表11に、インタビュー結果から文章構成に関わる部分を抜粋して表12に示す。

表11：協力者Dのアンケート結果

質問項目	回答
文章で一番言いたいことは最初に書いた方がいい	あまりそう思わない
文章で一番言いたいことは最後に書いた方がいい	どちらとも言えない

表12：協力者Dのインタビュー結果

I：中国語では、最初に自分の意見を出さなければならない。自分は反対ですとか。それから理由を書きます。最後にもう一度強調する。

.....

でも、日本語は最初は出さなくて、理由を全部書いて、最後に、だから賛成とか書く。先生に

言われても、どうしても慣れない。続けて書けないんです。

表11から、Dは統括型でいえば「非統括型」の文章構成のほうが良いという信念を持っていることがわかる。

しかし、表12のインタビュー結果では、「理由」－「主張」という「二段式」で「尾括型」の文章構成が日本では良いと教師に教えられたが、その文章構成には慣れることができず、「主張」－「理由」－「主張」という「三段式」で「双括型」の文章構成の方が書きやすいと述べている。

以上の結果から、Dは統括型では「非統括型」と「双括型」の既存プランを、構成型でも「二段式」と「三段式」の既存プランを持っていると考えられる。

2) 文章産出過程

Dは第一文を書き始める前に、3分間課題の図表を見ながら、第一段落と第二段落の内容を口頭でリハーサルしている。そして、このリハーサルを行うことによって、全体の文章構成も計画している。このことは、次の事後インタビューでも示されている。

Q：書きはじめるまでに3分ぐらい考えていましたけど、何を考えていましたか。

I：どうやって始めようかなと思って。私いつも最初がなかなか書きはじめられない状態で、途中なら早く書けるけど、最初はどうやって書くかを考えているうち、続きはどうやって接続するか一緒に考えてます。

Q：どんなことを考えていたんですか。

I：どうやって始めるかを考えてました。何を説明しているかみんなわからないから、問題を先に出さなければならぬかなと思った。

そして「なぜこれらの国に外国人労働者が流れ込んでいるのか、簡単に説明する」と文章の目的を明確化した上で、原稿用紙に第一段落を書きはじめている。

さらに、外国人労働者が流れ込んでいる原因を説明し終えた段階で、2分書き下ろしを中断し、「まとめ」をどのように書くかを計画している。この計画については、事後インタビューでも次のように述べている。

Q：書く前からこういうふうには書こうと思っていましたか。

I：最後は、書きながら考えました。ここまで書いたそのまま終わるのは変だなと思って。原因までは最初から考えてました。

.....

それから、私の普通の書き方ですから、問題だして、出してから、説明する、それから最後に少しのまとめとか書いて。じゃないと私終われないです。

このように、Dは、第一文を書き始める前は「問題提出」－「原因説明」という「二段式」で「頭括型」のプランを計画したが、「原因説明」だけでは終わることができず、「問題提出」－「原因説明」－「まとめ」という「三段式」で「双括型」の文章を書いたと述べている。この結果から、Dは教授された知識として、「二段式」・「尾括型」の文章構成の既存プランを持っているが、実際には、書き慣れている「三段式」で「双括型」の既存プランが文章の理想的な枠組みとして存在し、最終的には、その枠組みに当てはまるように文章を書き上げていると考えられる。

3) 文章構成

Dの書き上げた文章の分析結果を表13に示す。

表13：協力者Dの文章の分析結果

段落数	文番号	統括機能	冒頭・展開・結尾
第一段落	1	有	冒頭
第二段落	2－3	無	展開
第三段落	4－5	無	展開
第四段落	6－8	有	結尾

表13から、Dの書き上げた文章は、統括型では「双括型」、構成型では「三段式」であると考えられる。この結果からも、書き慣れている「三段式」で「双括型」の既存プランが書き上げた文章の構成に反映していると考えられる。

5. 考察

5.1 既存プランは、どのように文章産出過程に影響を与えるか

既存プランが文章産出過程に与える影響の分析結果をまとめてみると、次のようになる。

まず、AとCは、既存プランが文章の枠組みとして存在し、その枠組みに内容を当てはめていきながら文章を書き上げるという特徴を持っている。また、Dは二種類の既存プランを持っていたが、そのうち書き慣れている「三段式」で「双括型」の既存プランが最終的な枠組みとして、文章産出過程をコントロールしている。

これに対して、Bは統括型では「尾括型」の既存プランを持っていたが、構成型の既存プランを持っていなかったため、最初のプランの計画に時間をかけ、下書きを行った上で文章を書き始めている。

この結果から、既存プランを持っている場合には、そのプランが文章の方向性を示し、その方向性にそって文章産出が進められるが、プランがない場合には、文章の方向性を決定するまでに計画に時間を要することことがわかる。

5.2 既存プランは、どのように書き上げた文章に影響を与えるか。

既存プランの分析結果と書き上げた文章の分析結果の一覧を表14に示す。

表14 既存プランと書き上げた文章の分析結果

協力者	統括・構成	既存プラン	文章
A	統括型	尾括	尾括
	構成型	三段	三段
B	統括型	尾括	尾括
	構成型	無	二段
C	統括型	尾括・双括	双括
	構成型	三段	三段
D	統括型	非統括・双括	双括
	構成型	二段・三段	三段

表14から、次のことがわかる。まず、Aは既存プランがそのまま書き上げた文章に反映されている。Bは尾括型で書くべきだという信念も持っており、それが書き上げた文章に反映している。そして、CとDは共に複数の既存プランを持っているが、そのうちの一つの既存プランが書き上げた文章に反映している。

ここで注目したいのは、AとCとDの結果である。Aは「起承転結」で文章を書くという強い信念を持っており、事後インタビューでも、「起承転結」という構成で文章を書いたと述べている。その結果、意図した既存プランがそのまま書き上げた文章に反映されている。BとCは共に複数の既存プランを持っているが、ともに最終的な文章に反映された既存プランは、インタビュー結果から示唆されたものである。これは、教師から教えられたプランを知識としては持っているが、実際には、その教えられたプランよりも、自分が書き慣れているプランに従って文章を書き上げているということを示すものである。すなわち、プランの知識を与えるだけでは、そのプランは文章産出過程では文章の枠組みとして働いていないことを意味する。したがって、文章のプランを指導する場合には、プランを知識として与えるだけではなく、それが効果的な文章構成であるという強い信念となるように指導法を検討するべきであろう。

6. おわりに

ここまでの考察から、中国語を母語とした留学生の既存プランが文章産出過程と文章に与える影響について、以下の可能性が示唆された。

1) 既存プランを持っている場合には、そのプランが文章の方向性を示し、その方向性にそって文

章産出が進められる。

- 2) 既存プランは書き上げた文章の統括型と構成型に反映する。
- 3) 既存プランを複数持っている場合には、効果的であるという信念を持っている既存プランを用いて文章を書き上げる。
- 4) 既存プランを持っていない場合には、文章の方向性を決定するまでに計画に時間を要する。

衣川 (1994)、衣川 (1995) では、評価が高い文章を書くためにはプランの質が重要であること、そして、書き手が文章を書き始める前に文章のプランを持っている可能性を指摘した。そして、本研究では、上記のように中国語を母語とする留学生の場合、既存プランが文章産出過程と文章に強く影響を与えるという可能性を示すことができた。これらの結果から、作文指導を行う際には、まず第一に文章の目的に合った適切な文章構成のプランを指導することが重要であると言えるだろう。また、今回の結果は、文章構成型を知識として与えるだけではなく、それらが効果的なものであるという信念を形成するような指導をすることも大切であることを示唆している。

今後は上記の可能性を検証し、より効果的な作文指導法を構築していくために、以下の課題を検討していく必要がある。

- 1) 書き手の母語背景が既存プラン、文章産出過程、文章に与える影響を検証するため、中国語以外の言語を母語とする留学生を対象とした調査を行う必要がある。
- 2) 書き手の日本語能力が与える影響を検証するため、上級レベルの学習者だけではなく、初級、中級レベルの留学生を対象とした調査を行う必要がある。
- 3) 書き上げた文章と評価との関連性を調べ、文章の目的を効果的に達成するためには、どのような文章構成を用いればいいのかを明らかにする。
- 4) 文章構成型を提示し、それにもとづいて文章を書かせ、フィードバックを与えるという従来の作文指導法が果たして学習者の信念の形成に効果があるのかどうかを検討する。

注

- (1) 例えば、澤田 (1977: 160) は「論文の書き方」の中で、制限時間30分の小論文課題が与えられた場合、20分、少なくとも15分は考えるために使うべきだと述べている。
- (2) プランの構成概念については、資料分析方法で詳しく述べる。
- (3) 名古屋大学留学生センター年報 (1995.4~1996.3) によれば、1996年11月1日現在、名古屋大学に在籍する外国人留学生761人中、中国語を母語とする留学生は369人 (中国出身者323人、台湾出身者46人) を数えている。
- (4) ここでいう統括とは、「何らかの意味で、文章の内容を支配し、または、文章の内容に関与することによって、文章全体をくくりまとめる機能 (市川: 1978, p.157)」のことを指す。
- (5) ここでいう部分とは、「冒頭 (文章の初めに位置するひとまとまりの部分)」、「展開部 (文章の中核を形作る部分)」、「結尾 (文章の終わりに位置するひとまとまりの部分)」を指す。

- (6) ここでいう段落とは、「内容上の一つのまとまりとして区分される部分（市川:1978、p.146）」を指す。

引用文献

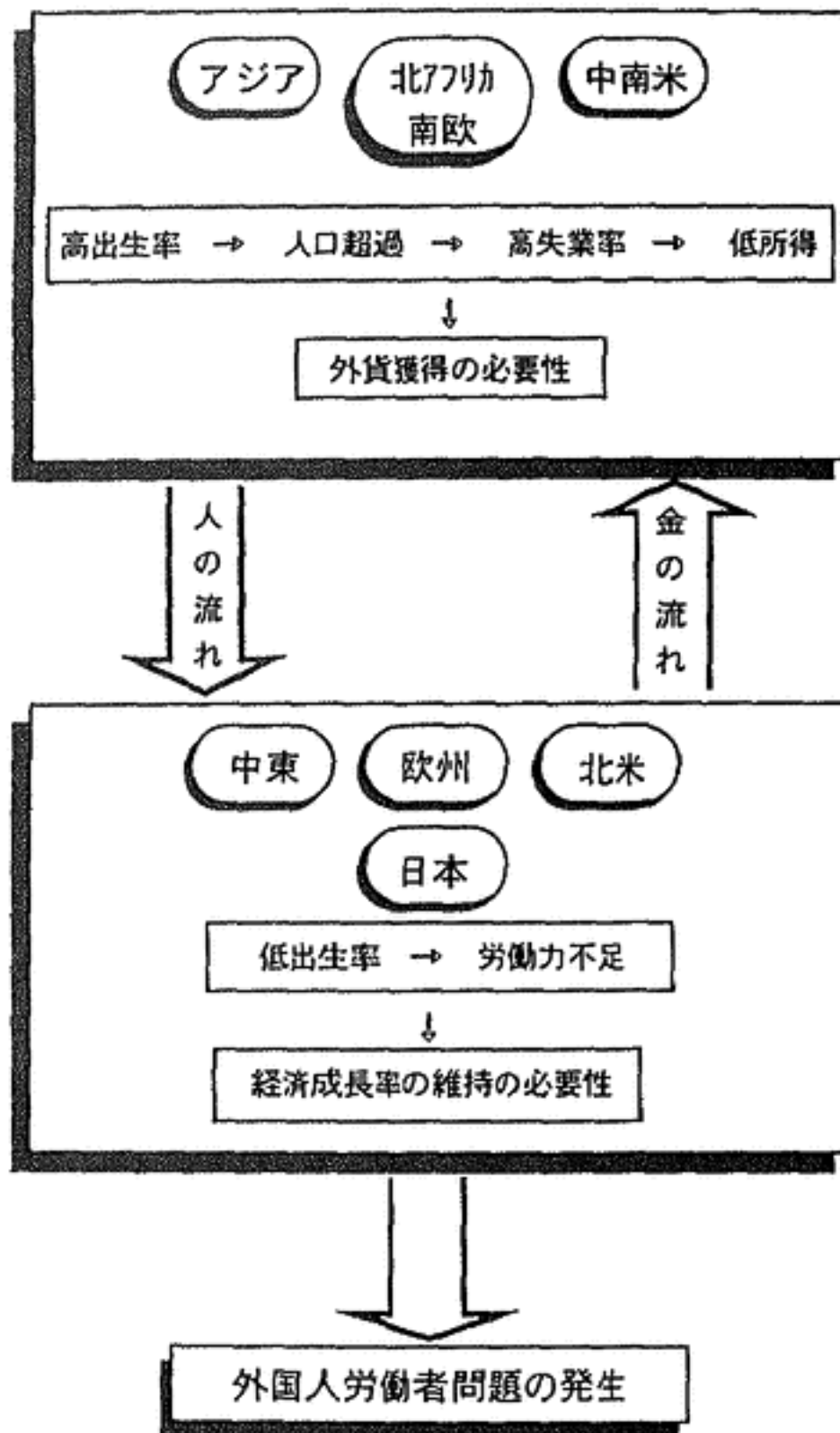
1. Langer, J. A. (1984) "The effects of available information on responses to school writing tasks." *Research in the Teaching of English*. 18 pp.27-44.
2. Scardamalia, M., & Bereiter, C. (1987) "Knowledge telling and knowledge transforming in written composition." In S. Rosenberg (Ed.), *Advances in applied psycholinguistics (Vol.2) : Reading, writing, and language learning*. pp.142-175. Cambridge University Press.
3. Voss, J. K., Vesonder, G. T., & Splich, G. J. (1980) "Text generation and recall by high-knowledge and low-knowledge individuals." *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*. 19. pp.651-667.
4. 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版社
5. 衣川隆生 (1993) 「日本語学習者の文章産出方略の分析」『ことばの科学』第6号、pp. 51-77、名古屋大学
6. 衣川隆生 (1994) 『日本語学習者における文章産出スタイルの分析』名古屋大学大学院文学研究科修士論文
7. 衣川隆生 (1995) 「大学院留学生はどのように文章を書き上げているか」[JALT JOURNAL] Vol. 17, No2. JALT, pp. 197-212.
8. 木下是雄 (1990) 『レポートの組み立て方』筑摩書房
9. 澤田昭夫 (1977) 『論文の書き方』講談社学術文庫

資料1 (課題文)

課題B (J・C)

現在、先進諸国では、外国人労働者が増加し、さまざまな問題が発生しています。なぜ、これらの国に外国人労働者が流れ込んでいるのか、その原因を説明してください。

(下の図の情報だけを使って書いてください)



資料 2 (作成文章)

A

- 1 「地球村」と言う言葉はマクルーハン氏が使い始めた
- 2 世界の国々で、お互いに交流し、手伝う時代が来ているというわけである
- 3 先進国は激しい経済発展をするにつれて、その国民達も気楽な職業を選ぶことが好きで、きつい労働をやらなければならない仕事あまり気に入れない
- 4 そこで、先進国の労働力がたりなくなった
- 5 先進国は発展途上国の方から労働者を大量に取り入れることが現状である
- 6 しかし、労働力の移動を適当に流さないと悪循環になるおそれがある
- 7 そして、異なる文化を持つ労働者は、大量に他の国へ行くとき、カルチャア・ショックにかかるかもしれないので、外国人労働者の問題が起こる
- 8 21世紀に向う地球は、これから、経済発展とか金稼ぎだけを考えるだけではなく、もっと、人口の移動とか、発展途上国の行方に気をつけなければならない

B

- 1 アジア、北アフリカ、南欧及び中米諸国では、高出生率による人口の数が超過しているので、就職難の問題が深刻である
- 2 そのため、国民の所得も低い一方である
- 3 逆に、中東、欧州、日本及び北米では、低出生率による人口が少ないので、労働力が不足の羽目になっている
- 4 そういうわけで、高出生率の国は外貨を獲得するために、低出生率の国へ人口を流出し、低出生率の国は経済成長率を維持するために、高出生率の国の人を雇うようになった
- 5 それが、現在先進諸国では、外国人労働者が増加し、さまざまな問題が発生しているゆえんである

C

- 1 現在、先進諸国では、外国人労働が増加して、さまざまな問題は発生している
- 2 先進諸国このような問題に頭を抱えている
- 3 なぜ外国人労働者は先進諸国に流入するのか、原因は以下である
- 4 アジアや北アフリカや中南米など国では、高出生率によって、人口過剰、高い失業率に困っている
- 5 結局、所得低下、外貨を獲得のために先進諸国に流入するだろう
- 6 その反面、先進諸国では、おもに中東、欧州、北米と日本など国では、長い間低い出生率の影

響で、労働力不足となり、経済成長の維持のために、外国から、安い労働者を導入しなければならない

- 7 こうして、国際的立場から見ると、発展途上国から、人は進先諸国に流入する、その反対に、先進諸国から、金は、発展途上国に流入する
- 8 互いに余っている物を補足することになるだろう
- 9 こうして、外国人労働者問題は発生した

D

- 1 現在、先進諸国では、外国人労働者が流れ込んでいて、そこで働いているとともに、さまざまな問題が発生している
- 2 どうしてこういうことが発生するのか、簡単に言えば、アジア、北アフリカ、中南米などの地域の国、いわゆる発展途上国では、高い出生率を持つため、人口超過となって、そこで失業率が高くなり、国民所得が低くなってしまふ
- 3 生活のためにも、国の発展にも、高い価値がある外貨を獲得することが必要となる
- 4 一方、日本を含め、中東、欧州、北米などの先進諸国では、出生率が下がりつつ、労働市場では労働力不足の問題が真剣になってくる
- 5 高い経済成長率を維持するために、安い賃金で外国人労働者を雇う
- 6 こういうふうには、発展途上国と先進諸国の間に、人と金の流れが発生していた
- 7 外国人労働者の流れ込むことが先進諸国の労働力不足問題を緩和したが、同時に他の面では色々な問題も出てきた
- 8 それは普通は外国人労働者問題と言う